

第17回石井十次顕彰のつどい

2月3日(土)中央公民館ホールにて開催いたしました。

記念講演でえびの市国際交流センター所長池本 要先生が『共に生きる』と題して人生経験の中での大切な生き方について記念講演をしていただきました。その後高鍋西小学校

の5、6年生による資料発表と『なわの帯』の児童劇を行い、町民のみなさんの期待に応えるすばらしい顕彰のつどいことができました。次回も町民の皆さん方、誘いあって多数出席下さることを期待いたします。



石井十次の歌をいつも披露していただいている
フラウエンコールなでしこ

多額のご寄付をいただき ありがとうございます。
厚くお礼申し上げます。

寄付者報告第16号

● 19. 1. 1 ~ 19. 12. 10

篤志寄付

宮崎市 印刷センタークロダ
高鍋町 坂田 師通
高鍋町 館野 キミ
高鍋町 立正佼成会高鍋教会
 教会長 岩崎 隆一
高鍋町 事務機のフクモト
米沢市 米沢信用金庫
 理事長 種村 信次

忌明寄付

高鍋町 清 奈須夫
宮崎市 本田 千代子
高鍋町 小澤 享子
高鍋町 河崎 寛

あとがき

天災とは言え、今年も台風4号に始まり中越沖地震など大きな災害に見舞われ、多難の年でした。被害を受けられた方々には心よりお見舞い申し上げます。

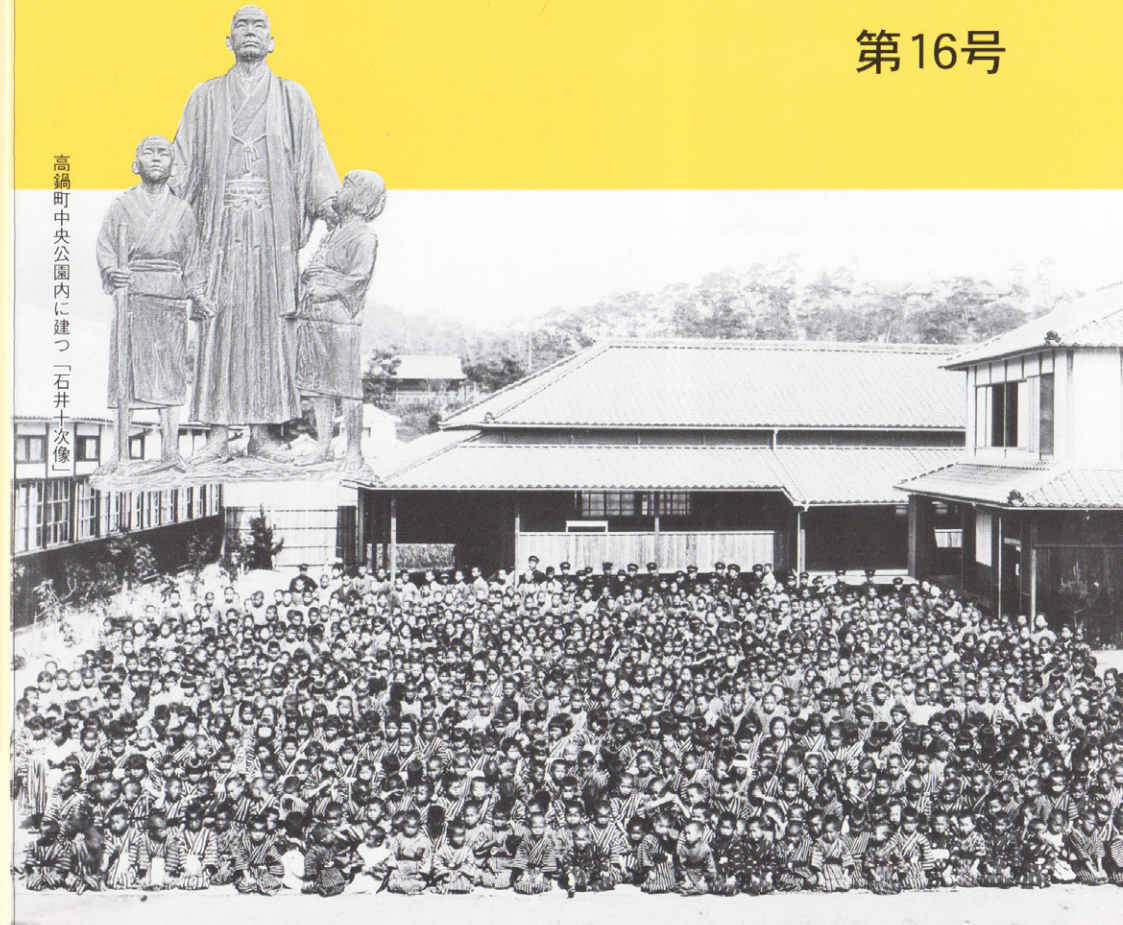
石井十次の思いやりの精神をより広めていくよう、顕彰活動に努力はいたしていますが、その成果は町民の皆様の深いご理解とご協力によってあげられるのではないかとおもいます。『顕彰会だより』第16号をお届けいたします。

財団法人 石井十次顕彰会

〒884-0006
宮崎県児湯郡高鍋町大字上江1138番地
TEL. 0983-23-4312

石井十次顕彰会だより

第16号



高鍋町中央公園内に建つ「石井十次像」

1200人余りの孤児で一杯の岡山孤児院(明治40年・西暦1907年)

財団法人 石井十次顕彰会



第3代 小野寺 茂 園長



初代 森 芳麿 園長



昭和25年分校から独立した当時の校門



昭和21年学園設立最初の戦災孤児たち

平成四年の第一回石井十次賞（北海道家庭学校）以来、第十六回（児童養護施設 似島学園）となり、平成十九年四月十一日に、その贈呈式を行いました。併せて、当日会場で発表された小中高校生の文章をお届けします。



学園の正面玄関



学園の校舎の全景



広島市の保育園に船通っている園児たち



秋の体育大会 中学生の組体操演技



クリスマス会で楽しむ園児



小富士山への登山



高校生代表の意見発表



小学校5年生へ石井十次小伝の贈呈

第16回石

井十次賞

皇を奉迎し 陛下より賜った「明るく元気に」のお言葉を園訓に定め 親しく口ずさむ園歌の「こころをあわせ力をあわせ いのちをあわせ」を胸に 働いて考え 考えて働くの理念のもと 愛と正義 感謝報恩の心の育成につとめて参りました 福祉と教育の一体化をはかり 生活自活可能な生産社会人の育成に専念し 三千人を超す卒園生を社会に送りました

この間 知的障害児童に配慮し 地域小規模養護施設「千田の家」を設け さらに高等養護部の認可を受けて社会参加と自立への教育を目指し 知的障害者については 知的障害者福祉ホーム「のぞみの家」同通勤寮「有終寮」を開設するなど地域社会との交流を深め 障害者自立支援の事業を先進的に実施して参りました

このことはまさに石井十次の理念に沿った偉業であり 心から敬意を表し ここに第十六回石井十次賞を贈りその功績を讃えます

平成十九年四月十一日

財団法人 石井十次顕彰会
理事長 税田 格十

石井十次賞

社会福祉法人
児童養護施設 似島学園 様

孤児救済を自らの天職と定め 五十年の生涯を捧げた児童社会福祉事業の先駆者 石井十次の人類愛と社会奉仕の崇高な精神を永遠に継承し 愛の心 思いやりの心を全国に広めるために石井十次賞を制定しました

貴学園は 原子爆弾の被災地広島島の荒廃し 混乱した市内をさまよう戦災孤児 三十四名を収容し設立されました 当初は 生活保護法による児童保護施設として 次いで児童福祉法の養護施設に認可され 後に社会福祉法人となり今日に至りました

戦後 生活物資の極度に乏しい中で 土地を耕し 海辺で塩を炊き 豚を養い カキを生産するなどの労働に明け暮れたとお聞きしました その過程で 教育の重要性を思い 小中学校の分教場を経て 昭和二十五年には学園内に小中学校を独立させました 開園まもなく昭和天



税田理事長より賞状を小野寺 茂 園長へ



謝辞を述べられる小野寺 茂 園長



祝辞を述べられる県児童家庭課 西野 博之 課長

「第16回石井十次賞」受賞施設紹介

『第16回石井十次賞』候補者募集を、平成18年12月20日を期限として全国都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会及び個人推薦人にお願ひしました。応募のあったその中から、平成19年2月23日、東京都において、選考委員会を開催し、審査の結果下記の施設に決定しました。



社会福祉法人 児童養護施設 似島学園

理事長 園長 小野寺 茂

住所 〒734-0071
広島市南区似島町長谷1487番地
TEL(082)259-2456
FAX(082)259-2180

【受賞施設紹介】

今回受賞となった児童養護施設 似島学園は、昭和21年7月（1946年）広島県社会事業振興連盟に於いて広島県戦災孤児収容所設立を決議した。同年9月に戦災浮浪児34名を収容し、広島県戦災児童教育所似島学園を創立、初代園長 森 芳磨先生が就任、同時に広島市立似島小学校分教場を併設、同年10月に児童保護施設として認可されている。昭和22年学制改革に伴い市立第4中学、宇品中の似島学園分教場を併設。翌23年には児童養護施設として認可される。昭和25年には市立似島学園小・中学校として独立している。更に昭和27年9月には社会福祉法人 似島学園として認可されている。

この似島学園は、今までの受賞施設とは異なって戦後にスタートした異色の養護施設と言っても過言ではない。今までの施設は、明治、大正、昭和、平成と四つの時代を経た古い歴史を踏まえたものであったが、第2次世界大戦でかつてない原爆という洗礼を受けた被災地広島戦後の混乱期のなかで原爆で壊滅した、がれきのちまたを路頭に迷う戦災孤児たちの救済のために設立されたものがこの学園の始まりであったようだ。34名をこの似島に連れて渡り収容し、生活物資のない混乱期の苦難を職員と共に乗り越えられ、現在までに約3000人近くに及ぶ戦災孤児たちを救済してこられたのがこの施設である。

初代 森園長、2代吉川園長が小学校・中学校を併設し更に独立させるまで努力され、福祉と教育を一体とした孤児たちの養育と自立を目指して積み重ね努力をして来られている。現在「明るく 元気に」と言う園訓のもとで自立への基礎づくりをし、温かく育て、社会参加に向けて地域で主体的に暮らすための人間育成を目指してすばらしい経営をしておられる。

児童養護施設似島学園はもとより、地域小規模児童養護施設 千田の家、知的障害児施設似島学園高等養護部、知的障害者福祉ホーム のぞみの家、知的障害者通勤寮 有終寮などが設置されそれぞれの目的に沿ってひとり一人の独立自活を目指して、園長を始め職員一丸となつてとても明るい園経営に努力されている。



石井十次先生の広い心

高鍋西小学校 5年 鈴木 祐 樹

ほくは、四年生の時に高鍋西小学校に転校して来ました。社会科や道徳、総合的な学習の時間などで石井十次先生のことを学び、「石井十次先生をしのぶ会」では、心に残ったことを俳句にして発表しました。

ほくは、石井十次先生のことを学んで、十次先生はすごい人だと思いました。

「縄の帯」の話では、友達が困っているのを見て、十次先生が助けてあげたことが、ほくは心に残りました。

ほくだったら、お母さんが作ってくれたつむぎの帯を友達にはあげないと思います。なぜなら、お母さんがせっかく作ってくれた物だから大切にします。でも、十次先生は、お母さんが作ってくれたつむぎの帯にもかかわらず、困っている友達にあげたということは、広い心をもった人だと思いました。

ほかにも、岡山孤児院で千二百人の孤児を救ったことが心に残りました。

岡山孤児院では、食糧もお金も少なく、苦しい生活を送っていたようです。でも、十次先生は、食糧もお金も少ない生活に決してくじけませんでした。孤児たちのために募金活動をしたり、神様においのりをしたりしました。十次先生の話聞いた人達から寄付金が送られたそうです。

ほくは、十次先生や孤児たちの生活を知り、「昔は大変苦しい生活だったんだなあ。」と思いました。その中で、千二百人も孤児を救った十次先生は、やっぱり「孤児の父」にふさわしい人だと思いました。

ほくも困っている人を見かけたら、助けてあげようと思います。十次先生のような広い心をもった人になりたいです。



強くて暖かい優しさ

高鍋西中学校 3年 岩村 慎太郎

石井十次先生が、「孤児救済」という偉大なことを成し遂げることができたのは、どうしてでしょうか。お金持ちだったわけではありません。ずば抜けて頭が良かったわけでもありません。十次先生は、他の誰よりも強く暖かい優しさをただ持っているだけなのだろうと思います。十次先生が、7歳の頃の天神様の秋祭りでの出来事です。縄の帯を友達にからかわれていた松ちゃんを、自分のつむぎ帯と交換して助けてあげたそうです。世の中で騒がれているいじめですが、自分が標的になることを怖がりいじめを見て見ぬふりをする人がいます。大人でも助けを求めている子どもの手をはらう人もいます。それなのにわずか7歳の少年が、当たり前のことのように目の前の弱い者に手をさしのべたのです。今の自分にとってこのことは、テストで満点とることよりも難しいことのように思えました。

また、小学校六年生のころ石井十次先生をしのぶ会の中で劇をしました。そこで自分は、巡礼の役をしました。十次先生は、夫を失い途方にくれる四国巡礼の貧しい母子に出会い、その長男を預かり育てる決心をしたのです。このことがきっかけとなり本格的な孤児救済運動を始めたそうです。家もお金もない、食べ物もない人々があふれていた時代に十次先生は、その人たちにとって神様のような存在だったのだと思います。でも十次先生は、ヒーローになろうとしたわけでもなく、家もお金も食べ物もない人々の神様になろうとしたわけでもありません。ただ、十次先生は、目の前で食べ物がなくて困っている人や、苦しんでいる人を助けたいという思いだけだったのだと思います。十次先生の強さと暖かさと優しさが、許さなかったのだと思います。

「志をたてるのに遅すぎることはない。」という言葉で以前聞いたことがあります。十次先生は医者道を進もうか、孤児のために生きようか迷っていたことがあるそうです。そのとき医者になるという志から「孤児救済」という志を選んだそうです。周囲の大きな反対もある中、十次先生は、辛く苦しいだろうと言われていた「孤児救済」という道を進んだのです。この決断をくだすには、一年半も悩んだそうです。その一年半という期間は、一言ではすませないほどの苦しみがあったことだと思います。孤児救済の道を選ばれてからは、何千人もの子供たちのために、一生をささげられました。十次先生の伝記の中に「7つのパンを六千人の群集に分け与えた」という文がありました。ふつうの人なら無理だろうと思うようなことでも十次先生はあきらめなかったのです。

自分は、立志の決意で自分の父のような父親になりたいと書きました。自分の父も十次先生のような強さと暖かさと優しさをもっている人です。自分もそんな大人になりたいと思います。弱い者に手をさしのべられる強く暖かい優しさをもった人間ほどかっこいい人間はいないと思います。今は、まだ強さや暖かさや優しさが自分には足りないかもしれませんが。でも父親になったとき子どもに「父さんのことが好きです。」といわれるようになりたいです。



石井十次という存在

高鍋高等学校 3年 幸津 光

「孤児の父」石井十次がこう称されるのは、もちろん、彼が、日本国内における孤児教育事業の先駆者であったからです。当時、誰も目を向けようとしなかった孤児教育事業に、自分の運命と考えて一生を捧げた十次の生き方には、学ぶべきところが多くあります。

十次が子どものとき、縄の帯を締めていたためにいじめられていた友達を見て、その縄の帯を母親の手作りの帯と交換した、というのは有名なエピソードです。このエピソードから見える十次の偉大さについて考えたとき、二つのことが思い浮かびました。まず、自分以外の人のことを気に留め、考えられるということです。時には、自分を犠牲にすることもいとわないのです。そしてもう一つは、現実をしっかりと見つめ、その現実から逃げないということです。このような精神をもって、十次は、孤児教育事業の道に進むべくして進んだのではないのでしょうか。

私が石井十次について意識を深めていく中で、ある一つの言葉が目にとまりました。それは、「静思」という言葉です。「静思」とは静かに思うということ。静かに思うということは、感情的にならずに、理性をもって落ち着いて考えることだと私は思います。

時には、千人を超える孤児たちを養育していた十次。孤児たちの中には、十次の思いを理解せず、自分勝手に行動する子もいました。十次はその様子を見て、自分の手には負えないと弱音を吐きます。しかし、別の日に、そんな自分を、しっかりしろ、感情的になるなと叱りつけるのです。

人をまとめる立場にある者は感情的になってはいけない。そう、十次が教えてくれているような気がしました。私も、以前、生徒会長として他の生徒を指揮し、文化祭の準備をしたことがあります。自分の思い通りにならず、いらいらすることも多くありました。そんなとき、私は、一人で、落ち着いてじっくりと考えました。これが、十次のいう「静思」なのだと思います。一度自分で深く考えたことで、新たな指針が立ち、それを実行した結果、文化祭も無事に終えることができました。石井十次が実践し、あのように孤児教育事業において大きな業績を残す礎となった「静思」。これから、この言葉を常に心に留め、実行しながら生活していきたいと思います。

孤児の父、石井十次がその生涯を終えてから、早くも百年が過ぎようとしています。もし、現在、十次が生きていたら、彼は何をしているのでしょうか。私は、孤児教育事業の枠を越えて、障害者や高齢者のための活動、さらには環境問題にまで取り組んでいると思います。なぜなら、十次には、大抵の人が目を背けてしまうことにもためらわずに立ち向かっていく、強い心があるからです。

十次の生きた時代、社会的立場の弱い人には、全くと言っていいほど目向けられていなかったようです。孤児教育事業も歓迎されたものではありませんでした。ここには、世間の多くの人々の自己中心的な気持ちや社会的立場の弱い人々を避ける気持ちがあったのだと思います。そして現在、同じような風潮が原因で起きているのが、障害者や高齢者の方への接し方の問題や、環境問題ではないのでしょうか。障害者や高齢者の方が困っているのを見かけても声をかけられなかったり、自分の周りだけきれいであればいいとポイ捨てをしたりする。十次であれば、決してこのような行動はとらないはず。周りがどうであろうと、改善のために尽力するはず。十次に協力し、墓前で弔辞を読んだ山室軍平は、そんな十次を「果敢実行の人」と評しています。

福祉事業も発達し、生活も豊かになった今、私たちは、石井十次の精神をもって、新たな問題に取り組んでいかなければならないのです。



The Great Person ~Ishii Juji

Takanabe-higashi J.H.S.
3rd grade Chie Kuroiwa

When he was six or seven years of age, Juji was dressed by his mother in a new kimono with a good belt for the harvest festival. "Now you look handsome! Why don't you go outside and play?" said his mother. Juji directed his steps toward the shrine, his heart beating with joy. A small boy was whimpering near the gate of the shrine "What's wrong, Matsukichi?" Juji asked. But he guessed from the way Matsukichi was dressed humbly in a torn kimono with a rope for a belt that he was being snubbed by his friends. "Stop crying, Matsukichi, I'll give you my belt," said Juji, taking off his belt for Matsukichi. Then he led Matsukichi over to his friends to join them and play.

In the evening, Juji went home only to be asked by his mother what had become of his belt. Juji told her the truth honestly, though he feared that he might be scolded for what he had done. But his mother gave him a gentle smile and said. "Is that right? Good for you. Matsukichi must have been very happy." His mother's response inspired Juji to begin his volunteer work.

This is the well known story about Ishii Juji. As you know he is one of the greatest people from Takanabe. I have been often taught Mr. Ishii's teaching since my childhood. Now I respect him and I'm very proud of him.

There are words Mr. Ishii left: '信-To believe in each other, 愛-To love each other, 和-To live together in harmony'. I always keep it in mind and I try to do my best to be a useful person for society.

偉人 石井十次

高鍋東中学校 3年 黒岩千恵

石井十次は6歳か7歳の頃、秋祭りのために母親から新しい着物と帯を着せてもらいました。「ほら、とても似合っているわよ。外で遊んでらっしゃい。」と母親が言いました。十次は、すぐに神社へと向かいました。彼は胸をはずませ天神さまに向かいました。すると鳥居のそばで小さな男の子がしくしく泣いていました。「松吉どうしたんだい。」と十次は聞きました。十次は、松吉がやぶれた着物を着て、なわの帯をしめているので、のけものにされているのだと察しがつきました。「泣くな、松吉。」「お前にほくの帯をあげるよ。」そう言って自分の帯と松吉の帯をとりかえました。それから松吉を連れて行き、皆と遊びました。

その日の夕方、十次は、自分の着物の帯のないことを母にとがめられるであろうと思いつつも、その理由を正直に話しました。しかし母は穏やかに微笑んでこう言いました。「あら、本当。いいことをしたわね。松吉もきっと喜んだことでしょう。」母のこのような言葉は、十次がボランティア活動を始めていくきっかけとなりました。

この話は、石井十次の物語として広く知られています。皆さんもご存じのように石井十次は、郷土高鍋の偉人の一人であります。私は子供の頃から、十次の教えを色々な機会を通して学んできました。そして、現在、十次をととても尊敬していますし、誇りに思っています。

ここに十次が残したとても素晴らしい言葉があります。

「信」 互いに信じ合うこと。

「愛」 互いに愛し合うこと。

「和」 共に助け合い生きること。

私はこの言葉をいつも自分の心にとめ、世の中の役に立つ人になるよう最善を尽くしていきたいと思えます。



The life of Juji Ishii

Takanabe-nishi J.H.S.
2 rd grade Mami Hayashi

Juji Ishii was born in 1865, in Babanoharu, Takanabe Town, in Miyazaki prefecture. Juji was an ambitious boy and wanted to be a naval officer. So he went to a school in Tokyo called Kogyokusha, but a year later, he fell ill and was not able to fulfill his dream.

He returned to his village and decided to work on the barren land with his friends but a typhoon came and destroyed everything. He then changed jobs and worked as a secretary at the Miyazaki Police Office, but even this job did not satisfy him. One day when he was sick, he met a doctor, Dodohei Ogiwara, who entouraged him to become a doctor.

When he was eighteen years old, Juji studied medicine and Christianity at Koushu Medical Institute and went back to his hometown during the summer holidays. In his town, he established a school called Babano-haru-asaban school where young villagers could study. During the day, they would work in the fields and then study together at night. Juji was greatly respected by all the villagers.

One day Juji found a boy and a girl dressed in shabby kimonos at the temple. They looked up at Juji with fear and anxiety on their faces. The instant Juji gave rice-balls to them, these children wolfed them down. That night their mother was also at the temple. She said to Juji with fear-filled eyes, "We are living our lives as beggars with no place to stay nor relatives to rely on. Wherever we go, people throw stones at us and make us go away. Sir, we can't keep on living this way. I implore you to take care of this boy." Juji went home. His heart was full of sympathy. "Shinako, my dear, can't we do something for them?" Juji said to his wife. She answered in a compassionate tone, "Just one boy would not be too much trouble!" They decided to adopt the boy named Sadaichi and bring him up. More and more people heard about this and Juji was asked to look after many children. Later, he set up "The Orphan Education Association."

I'm proud of Juji Ishii, because he is an outstanding person who came from my town. He is one of the great men who contributed to the progress of the Japanese welfare system. Juji's statue continues to look down warmly on us. The people of Takanabe will never forget his spirit.

石井十次先生の生涯

高鍋西中学校 2年 林 真美

石井十次は、1865年、宮崎県高鍋町馬場原で生まれました。十次は志を高く持った少年で、海軍士官になりたいと考え、攻玉舎という学校に入りました。しかし1年後、彼は重い病気にかかり、夢を果たすことができませんでした。

十次は、郷里に帰り友人といっしょに荒地の開墾をはじめましたが、台風が襲い、田畑はすべて流されてしまいました。それから仕事を変え、宮崎警察署で書記として働き始めましたが、この仕事でさえ十次を満足させることはできませんでした。そんなある日、十次は病気にかかり、荻原百々平という医者に出会います。彼は十次に医者になるよう励ましてくれました。

18才のとき、十次は甲種医学校で医学とキリスト教を学びました。夏休みになると必ずふるさと高鍋に戻りました。そして村の若者たちのために「馬場原朝晩学校」という学校を設立しました。昼間は田畑に出て働き、夜はみんなで勉強をします。十次は村の人々に大変尊敬されました。

ある日、十次は寺にぼろをまとった男の子と女の子を見付けました。二人はおどおどとして不安そうな目で十次を見上げました。十次がおにぎりを差し出すと、二人は奪いとるようにして、あっという間におにぎりを平らげました。その夜、寺に二人の母親もいました。「わたしたちは、家も身寄りもなく物乞いをして生きています。どこへ行っても人から石を投げ付けられて追い払われてしまいます。このままでは生きていけません。どうか、男の子だけでもあずかってください。」十次は胸いっぱい哀れみの情を満たして家に帰りました。「品子、私たちに何かできないだろうか。」十次は妻品子に相談しました。品子は哀れんでこう答えました。「男の子だけならなんとかありますよ。」二人はその定一という男の子を引きとり、育てることにしました。人々がこのことを聞いて、たくさん子どもたちが十次に預けられたのでした。そして、のちに十次は「孤児教育会」を設立したのです。

私は、十次を誇りに思います。同じ高鍋町の人として、そして、日本で福祉の道を開いた一人の偉人として。十次の銅像は、これからもずっと私達を見守ってくれるでしょう。高鍋の人々は十次の精神をいつまでも忘れないでしょう。